

育児中の助産師学生に関する研究

A Study of Midwifery Student-Mothers —Negotiating Study and Child-Rearing—

鈴木 由美, 古賀 裕子, 島田 葉子*

* 足利工業大学看護学部

1. 緒言

国際助産師連盟（以下ICM）では1年6ヶ月以上の教育を推奨している。これに対して日本では保健師助産師看護師法学校指定規則において1年以上の教育課程を必須としている。1年間でICMが提唱する教育内容を取得するには過密スケジュールが予測される。

日本では1年制の助産師養成課程においてはほぼ30単位以上の単位履修をもって修了となり、指定規則の28単位より多くの単位取得にて卒業する¹⁾。このように1年課程ではカリキュラムの過密状態が前提であるため、クリアできるのは学生の強い動機などが要因となっていると推測する。

また助産学実習では看護学実習とは異なり、分娩介助等の実践が単位取得の必須要件であり、学生は時間を問わず厳しい実習状況下におかれる。このため身体的にも精神的にも強さが要求される。田中ら²⁾は、助産学実習は対象者との関わりが多い、学生に求められる能力が高い、学生としての責任が重い、実習体制などが看護学生の実習とは異なることを指摘している。従って学生はこれまで体験した実習よりも厳しい状況下におかれる。

助産学実習はウェイトの大きいものであり、保健師助産師看護師学校養成所指定規則で助産学実習は11単位を必須とされている。助産学実習以外の講義においても、学生にとって学習内容が濃厚で課題が多く、1年課程であるために過密スケジュールとなることが前提となる。

大学専攻科、別科又は専修学校など助産師養成の1年課程は、学費の負担が少ない、看護大学の卒業生のほか、看護師などの臨床経験者、社会人経験者などが入学できるメリットがあると考えられる。高野ら³⁾による社会人経験のある新人看護師を対象とした報告や、高

橋⁴⁾の社会人経験者の実態などの報告、渡邊ら⁵⁾の社会人経験がある看護学生に対する教育側からの困難感などの報告があるものの、助産師学生を対象とした報告はみられないため、追究する意義があると考えられる。

中島ら⁶⁾は、助産学教育の質的向上を図るためには、学生の特性を踏まえた教育法の開発や教育的支援を強化する必要性を指摘している。このため学生の特性として、育児経験者、臨床経験者、社会人経験者などを対象とし、その背景を踏まえた教育を検討することが期待される。

そこで今回本研究では、育児中の助産師学生の1年間の学生生活の実態に焦点をあて、今後の教育側の対応への検討に資する目的で半構成的面接を行い、質的帰納的に分析したので報告する。

1. 研究目的

育児中の助産師学生における1年課程の助産師養成機関への進学動機から、入学後直面した課題及び育児に及ぼす学生生活の影響等について分析し、助産師教育の一助とする。

2. 研究対象

X大学の1年課程の助産師養成コースの学生で未成年の子どもがいる者のうち、インタビューへの同意とその内容のICレコーダーへの録音に許可を得た8名。

3. 調査期間：平成26年3月15日～3月20日

4. 調査方法：対象者に対してインタビューは個室で行い、他者の入室ができないようにし、集中して話せるように他の音声が入らないよう調整した。面接に要した時間は一人あたり15～20分でその内容は本人の同意を得てICレコーダーにて録音した。聴取した記録は逐語録をとり、同意味の文脈単位にまとめ、コーディングしたものをサブカテゴリーとし、更に同一サブカテゴリーと思われるものをカテゴリーとしてまとめ、最終的に命題する内容分析の方

表1 対象者の背景

| | 年代 | 子どもの年齢 | 職歴 | 家族形態 | 支援体制 |
|-----|--------|-------------|---------|--------|------|
| 学生A | 40歳代前半 | 幼稚園・小学生 | 会社員 | 核家族 | 実父母 |
| 学生B | 30歳代前半 | 幼稚園 | 看護師 | 隣に義父母 | 義父母 |
| 学生C | 30歳代後半 | 幼稚園・小学生 | 看護師 | 夫婦と実父 | 夫/実父 |
| 学生D | 30歳代前半 | 小学生 | 会社員 | 実母 | 実父母 |
| 学生E | 30歳代前半 | 幼稚園 | 公務員 | 核家族 | 実母 |
| 学生F | 30歳代前半 | 幼稚園 | 看護師 | 夫婦と義母 | 夫/義母 |
| 学生G | 40歳代前半 | 幼稚園、小学生、中学生 | 看護師 | 夫婦と義父母 | 義父母 |
| 学生H | 30歳代後半 | 小学生 | 会社員/看護師 | ひとり親家庭 | 近隣に親 |

面で見えてきた助産師)〈何としても合格したい〉の3カテゴリーが抽出された。サブカテゴリー〈心の奥に持ち続けた憧れ〉は《いつか助産師になりたい》《助産師になるための転機》《今の時代の資格は魅力》の3つのサブカテゴリー、〈様々な場面で見えてきた助産師〉は《自分の出産体験》《人の出産体験》《母性看護実習》《インプットされた助産師モデル》の4つのサブカテゴリー、〈何としても合格したい〉は《独自に工夫した受験対策》《周囲を巻き込んだ生活調整》《乳幼児の生活へのしわ寄せ》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

法をとった。分析過程においては偏りを防ぐため、共同研究者と繰り返し検討し、カテゴリー名が一致するまで協議を繰り返した。

5. 倫理的配慮

本研究は平成25年6月に桐生大学倫理委員会の審査にて承認を受けてから開始した。未成年の子どもを育てている助産師学生を対象とし、インタビュー前に研究依頼書を提示して研究方法、目的、インタビュー実施後のデータ収集の内容と方法、個人情報保護と研究終了後のデータの安全な処分方法について説明を口頭及び紙面で行い、さらにインタビューに応じない場合や途中で中断した場合でも教員から対象者への対応に不利益はないことを伝え、対象者より口頭又は紙面で許可を得た。

6. 用語の操作的定義

育児中の学生：ここでは未成年の子どもを育てながら1年課程の助産師学生を続ける者をいう。臨床経験、社会人経験がある学生も含む。

II. 結果

1. 対象者の背景

今回の対象者8名の背景は表1に示す通りであった。年代は30歳代～40歳代で臨床経験がある者が5人、それ以外が3人、家族構成については核家族が2人で、ひとり親家庭が1人であった。サポート体制は夫が2名、義父母または義父または義母のいずれか、または実父母または実父、実母のいずれかなどで支援者がいない学生はいなかった。しかし期待していた複数の支援者が入院などで依頼できなくなったケースが1件あった。子どもの年齢については幼稚園～小学生が殆どで、中学生は1人であった。

2. 入学動機と入学準備

以下文中ではカテゴリーを〈〉、サブカテゴリーを、《》、で示す。またイタリック体は語りの内容(原文)で記した。

入学動機は〈心の奥に持ち続けた憧れ〉〈様々な場

面で見えてきた助産師)は《自分の出産体験》《人の出産体験》《母性看護実習》《インプットされた助産師モデル》の4つのサブカテゴリー、〈何としても合格したい〉は《独自に工夫した受験対策》《周囲を巻き込んだ生活調整》《乳幼児の生活へのしわ寄せ》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

奨学金をうけていたので3年は働くとういことで産科がある病院に入ったんですが、産科がなくなってしまって(中略)子どもが二人目生まれて落ち着いたので、やっぱり助産師になりたいっていうんで、これを受けて受かったら、きっと運命だと思って、やろうと思って、学生の時からの夢でした、純粋に。(学生B)

母性の授業がありまして、そこで出産、産褥にどんな看護師が関わっているのかということを学んだ時に、私が出産した経験とはすごくかけ離れたもので、自分が出産したときすごく嫌な思いで終わっていたので、他の人が産むときはいい経験を、人生でめざしました。(学生E)

動機は、やっぱり私の出産体験ですね。(中略)反面教師じゃないけど、そういうのを生かしてやれたらいいかなっていう風に思ったのがきっかけですかね。(学生F)

3. 入学後に直面したこと

「入学後に直面したこと」は〈予想を超える勉強の大変さ〉〈意識下にある子どもの存在〉〈自力では乗り切れない学生生活〉の3カテゴリーが抽出された。〈予想を超える勉強の大変さ〉は《学習能力の限界》《追い付かない体力》の2つのサブカテゴリー、〈意識下にある子どもの存在〉は《子どもの側にいない自分》《状況に前向きに立ち向かう》の2つのサブカテゴリー、〈自力では乗り切れない学生生活〉は《教員に煽られて》《家族の協力が前提》の2つのサブカテゴリー

リーで構成されていた。

学生はこれまでの生活を変更させ、自分の体力を追い付かせることに苦慮していた。学生生活を優先させることで私生活へのしわ寄せが大きくなることも実感していた。

朝起きて家事をしてこう、1時間10分位車で運転してくるんですけど、もうつくつと疲れちゃって、集中したいんだけど、なんかもう席に座った途端に力が抜けちゃうみたいなどころがありました、はい。(学生A)

一番は子供の行事とかに出られなかったり、そういうことでうちの家族に協力してもらったんで、この1年はそういうつもりでいるように、(中略)で何とか乗り越えてきたかな感じなので(学生C)

ああ、想像通りでした。学業から離れていたわけじゃないので、看護学校からそのままきたので、学業的な問題としてはずっと勉強していたので、周りの環境もずっと協力的で、夫も実母も協力的だったので、問題っていうのはなかったです。(学生E)

4. 子どもへの想い

〈周囲を巻き込む生活の変化〉〈育児より学業を優先せざるを得ない状況〉〈聞き分けの良い子どもたちと都合良く解釈する親〉の3つのカテゴリーが抽出された。

〈周囲を巻き込む生活の変化〉は《周囲の協力が前提にある》《子どもと共に変更を余儀なくされる生活スタイル》の2つのサブカテゴリー、〈育児より学業を優先せざるを得ない状況〉は《学業と育児の折り合い》《学業と育児の葛藤》の2つのサブカテゴリー、〈聞き分けの良い子

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード |
|---------------|----------------|--|
| 心の奥に持ち続けた憧れ | いつか助産師になりたい | はじめから助産師を目指していたので看護学校に入った。 看護学校の入学動機は助産師になるためだった。 奨学金を返済予定の病院の産科がなくなり自分の結婚、出産などで進学から遠ざかった 昔から憧れがあった 助産師になりたく産科に勤務し、子供ができてそのままだった 社会人経験を経てから入学した 看護学校3年の時に(助産)にいかうかと意識したのが1年前である |
| | 助産師になるための転機 | 助産師育成制度を紹介された 県の奨学金を使えば何とかかなと思った 助産師が怖いイメージで絶対ならないという気持ちが変わった ハイリスクが多くなり絶対助産師にはならないと思っていたが考えが変わった 職場が新しい流れになり助産師は良いと思った 産休で復帰して働いた時に見方が変わり助産師は良いと思った 師長がスタッフを推薦した経緯から情報をくれた |
| | 今の時代の資格は魅力 | 周囲の友人の影響で結婚前から資格が欲しいと思っていた。 看護職は求人が多いから |
| 様々な場面でみてきた助産師 | 自分の出産体験 | 自分の出産で助産師に大変親切にされてうれしかった 出産を経験して資格をとるなら看護師がよい 自分も人にうれしい経験を他の人にする仕事につきたいと思った |
| | 人の出産体験 | 人の出産経験をみて目指すことにした 自分も出産をしているので、看護の道に行くなら、その母性のほうをきわめていきたい 出産のとき、助産師さんに助けてもらわなかったらちゃんと産めなかったって 助産師次第で育児に自信がもてるかどうか左右されるものだ 自信をもって育児に取り組めるように関わられる助産師になりたい |
| | 母性看護実習 | 看護学校で母性看護の授業があり、出産、産褥で看護師の関わりが嫌な思いをした自分の経験とはかけ離れていた 母性の授業がとっても楽しく感じた |
| | インプットされた助産師モデル | 家族が自分働いている姿に格好良さ、憧れを抱いてくれた 偶然近いところで県立で学費が安い看護学校があったので挑戦した。 周囲の友人の影響で結婚前から資格が欲しいと思っていた。 出産を経験して資格をとるなら看護師がよい 昔の産婦人科にいるときは、助産師さんが絶対だった マイナスの面とかが多く見えてちょっとへこんだ時期があって、絶対助産師にはならないと思った時期 昔助産師は絶対怖いイメージしかなくて絶対助産師になんかなるもんかって思っていた |
| 何としても合格したい | 独自に工夫した受験対策 | 看護学校の実習が終わりすぐだったので準備の時間がなかった 実習があったので1か月くらいかけて推薦入試の小論文の勉強をした 過去問などからその時のトピックで問題を想定した看護師資格取得後だいたいぶたっていたので通信教育で受験対策をした 1年間に5万円くらいかけていた 推薦入試で友達や先輩が受けていたので情報ももらった 特に準備に時間をかけていない 小論文のテーマはニュースなどから考えた 人に小論文を読んでもらい添削してもらった 国試と同じように母性小児を重点的に問題集で勉強した |
| | 周囲を巻き込んだ生活調整 | 時間はつくるもの 個人病院であるため患者のいない空き時間があり、周囲の好意などから勉強させてもらった。 思い立って助産師学校受験のための勉強法として予備校で通信で受験対策をした。 夫は協力的ではあったが、実家の両親の助けが大きかった。 合計3年間の協力があった助産師になる道 夫の協力もあったが実家の親の助けが大きい 実家の協力により勉強した |
| | 乳幼児の生活へのしわ寄せ | 子供が小さいので生活の工夫をした あえて子どもが小さいのに受験を考えたタイミングは勢いか 子供が0歳代だったので勉強の時間を取るのが大変。 近くの実家に育児を手伝ってもらい受験勉強の時間をつくった 0年半くらいで準備、転職で子どもの生活に合わせて夜勤が無い勤務になった 子どもにとっては卒後の3年間 |

どもたちと都合良く解釈する親)は《良心の呵責/うしろめたさ》《慣れた子供のいじらしさ》《親の後ろ姿を見せていると正当化》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

子どもへの影響が多少出てくる時期に葛藤する場面で、それぞれに消化させて学業を続ける。

忙しすぎて、母親とこう、接する時間が短くなったときに精神的に子どもが不安定になったときには、悪いなというか、もうちょっと関わり方を考えなければなとか、(接する)時間が短か過ぎるかなというのは感じましたね。(学生 A)

忙しい時は十分にかまっていられなかったし、夜いないとか寂しかったらうな(中略)「ママ行かないで」とかたまにやっぱりいうので、そういうのはぐっとくるものがあり、これからもやっぱり仕事したら、こういうのが続いていくし(中略)それがまた子どもにとって悪いかとかは思わないようにはします。(学生 B)

なんか子どものことまで犠牲にして本当にやりたかったことかなって思うこともありました。(学生 F)

学校の先生が協力的で(中略)私のことをこう立ててくれて「すごいんだよ、お母さんは」って指導をどの先生もしてくれましたよ。(中略)ちょっと逆に子供たちもいい刺激になったかな。(学生 G)

また子どもが親を理解し、聞き分けのいい子どもになっていくという次のような語りが見られた。

子どもの側にいて挙げられないとか、イベントにでてあげられないとか(子供の方から)「ママ勉強がんばって」とかいつってくれるので、なんとか甘えています、はい。(学生 E)

学生が長かったんで(中略)後ろめたさみたいなのはなかったんですけど。(看護学校も)回りがそういう人が多かったんですよ。子どもがいて看護学校に行く人ってすごく多いので、別に特別な感じではなかったんです。(学生 H)

5. 卒業時の助産師像

〈助産師業務の再認識〉〈良くも悪くもモデルとなった助産師たち〉〈取得した資格を活かす抱負と不安〉の3つのカテゴリーが抽出された。〈助産

表3 入学後に直面したこと

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード |
|----------------|--------------|--|
| 予想を超える勉強の大変さ | 学習能力の限界 | 純粋に学生になることの難しさがあった。 回りを見ながら真似した やるが遅く課題をすぐにできない 今までの定時制の学校の許容範囲を超える 見て覚えることで復讐して克服した 看護学校時代よりも吸収力が弱くなった 覚えても出て行くことが結構あった 頭にすんなり入ってこない。 頭に入ってこない 純粋に学生になることの難しさがあった。 頭に入ってこない 勉学についていかれるかどうか問題 何とかテストにも何とかついていっている感じ 勉強も大変だった 20歳代の学生と組んで頭の回転の良さはすごくついていけない |
| | 追い付かない体力 | 家事と通学ですぐに疲れて力が抜けた 想像通りだった 体力がなく眠くなる 子供が2人いること、学校までの距離など体力的につかれた。 授業中寝てしまった 最後はやらなければと思いついて ドリンク剤を飲んだりして対処した。 授業中寝てしまったりもした 家事をして通学ですぐに疲れており、集中したい力が抜けたようになった。 覚えても出て行く場面が結構あった。 社会人経験を経て体力がなく、眠くなってしまう 想像通りだった 子供が1人いること、学校までの距離など体力的につかれた。 |
| 意識下にある子どもの存在 | 子どもの側にいない自分 | 子どもがいるのを知っている指導者が遅くなると気を遣ってくれて逆に気を遣わせたのではと思った 子どもがいるいないってのは結局、仕事をしてても一緒 子どもが宿題をやらずゲームをしたがるので困っている 誰も見てくれないので子どもだけで留守番している 授業の終了時間が遅くなると子どもが心配だった |
| | 状況に前向きに立ち向かう | 子どもの有無は結局仕事をしてても一緒である 夜必ず帰るので、子どもと同じサイクルになり子供と接する期間、時間が長くなった 子どもが体調が悪かったりなんて仕事しても学校に行ってもなにも同じ状況 興味があるので楽しい |
| 自力では乗り切れない学生生活 | 教員に煽られて | 戸惑ったが先生方にも協力してもらい一つ一つこなしてきたと思う 母親で子どもがいる学生も容赦しないといわれていた 入学前に子どもがいても特別扱いをしないといわれていた |
| | 家族の協力が前提 | 子供の行事に出られないことで家族に協力してもらったことがあった 看護学校から家族が協力的だったため問題はなかった 入学前ガイダンスで家の中を調整した 子供の行事に出られないので家族の協力で乗り越えた 看護学校から勉強しながらそのままだったので夫、実母など周囲も協力的だったため、問題はなかった |

師業務の再認識)は《知り得た助産師の責任の重さ》《助産師に対する認識の変化》の2つのサブカテゴリー、〈良くも悪くもモデルとなった助産師たち〉は《漠然とした憧れ》《真似たい技術をもった助産師》《学生にやさしい助産師》《なりたい助産師に出会わない》の4つのサブカテゴリー、〈取得した資格を活かす抱負と不安〉は《助産業務より優先される就職先の条件》《自分の適性を踏まえた将来像》《成長したい自分》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。

入学時に思っていたよりもかなり厳しい場であることを知り、自分の将来像を固めていく語りがみられた。

将来的に助産院で働きたいなと思っただけですが、そんな簡単なことではないなということを実感したところがあります。(学生 A)

そんなに軽率に思っていたわけじゃないんですけど、やっぱり、命を生み出すって立場にたつのは、いままで死期をみとったりするよりずっとずっと責任が重いんじゃないかって思って。(学生 B)

産婦さんと、こう暖かく支援するイメージしかなかったけど、実際はすごく責任が重くて、ちょっと逃げ出したいなと思うようなこととか変化はいっぱいありました(学生 D)

出産とか入院している間に関わればよかったんですけど、全般的なライフサイクル全般に関わっていかないとはいけないうて。(学生 E)

やっぱり助産師さんって深いとこまで、あとは実習をしていて、こまやかかっていうか、一瞬でいろんなことを見抜いて、それを実践していける人たちなんだなって。(学生 G)

| カテゴリー | サブカテゴリー | コード |
|------------------------|------------------------|---|
| 周囲を巻き込む生活の変化 | 周囲の協力が前提にある | 家族がいなかったら、実習も演習も勉強もできないので家族の協力次第だと思う。 実習終了時間や朝が早いことが続き、夫の実家の協力に尽きる。 遅くなると子供を見てもらうための実家との調整が大変 主人の方の実家がすぐ近くありお義母さんがよくやってくれるので助かってます 実習中は実母に継続事例が来る直を話してきてもらってやった。 自分が日中に学校にいてるときは、幼稚園預かり保育をした。 実母の体調が悪い、実父の入院、祖父母の入退院で頼める状況ではなかった 夫にもかなり協力してもらわないとできないので「悪い」と思いながら行かせてもらって頑張るしかないと思った。 指導者が子どもがいることで気を遣ってくれた |
| | 子どもと共に変更を余儀なくされる生活スタイル | 子供たちより先に家を出るような日がある 仕事していた時と同じような状況なので夜勤がないぶん楽だった 夜勤がなく夜帰って夜寝られる状況だったの楽だった 友達の家について勉強と一緒にできたので良かった 子どものこともしつつ、また自分の実習のこともしつつ大変だった 看護学校に入学するときからの覚悟があり4年間の予定であった 実習場に行く時間が自分の病院に行く時間よりも長かった |
| 育児より学業を優先せざるを得ない状況 | 学業と育児の折り合い | 忙しいときに十分にかまえないことから埋め合わせをしているつもりである 時間は短くてもその子に集中して話すようにした 接する時は悪いなというのを排除してその時間を楽しむ 実習はしなければならぬのでその点だけはどうも夜勤がある実習と思っていたが逆に夜帰って夜寝られる状況だったので思っていたよりは楽 |
| | 学業と育児の葛藤 | 子どものことを犠牲にしてまで本当にやりたかったことなのか 子供にせがまれてぐっとくるものがある 課題とか宿題で週末も遊びにも行けずもってみたい葛藤はあったが後悔したくないので今はやってよかった 子供に悪いとか思わないようにしたい。 |
| | 良心の呵責/うしろめたさ | 夜いないことで寂しい思いをさせている 1年間、学業に徹すると親が参観日などにかかれなくて悪いと思う 申し訳ない気持ちはあります 関わっている時間が短くて悪いと思う イベントにでてやれない 実習中は土日も子供の相手をしてやれなかった 今年だけは(行事に)いけないと子供に話していた 朝ごはんも晩御飯もほとんどつくってやれなかった 保育園の運動会もいけなかった 悪い、申し訳ないと思った |
| 聞き分けの良い子どもたちと都合良く解釈する親 | 慣れた子供のいじらしさ | 元々看護職で子供が1歳の時から夜勤をしていた看護学生だったのでいつも勉強しているのに特に何も言わない。 忙しすぎて子供が不安定になった時があった。 子どもに順応性があると思うのは、「学校」といえば「学校頑張ってきてね」という。 子どもに励まされるので甘えている |
| | 親の後ろ姿を見せしていると正当化 | 親の背中をみて頑張っている姿をみて夢を持っていかれたらいい 夢を持たない子が多い今、自分も夢を持ったら達成させて子供に見せたいと。 私をみて格好いいと感じることが影響を与えている 大人になった時に自分が勉強している姿が役立てばいいと思う 頑張ってる姿見たら子供もわかるのではないかな 仕事をする以上今のようなが続くが「親がいなくても子は育つ」と思う エゴかもしれないけど、子供たちに思ってもらえたらと思う。 少し迷惑をかけることがあっても自分が勉強している姿を見てもらえる |

| 表5 卒業時の助産師像 | | |
|--------------------|-------------------|--|
| カテゴリー | サブカテゴリー | コード |
| 助産師業務の再認識 | 知り得た助産師の責任の重さ | とても厳しくて看護学校時代からなりたかった助産師はバツと見て妊産婦や家族を素早く判断する仕事だと思った 責任の重さをすごく感じて簡単なことではない産ませることはすごいという思い 助産師を見てリアルなイメージが具体的なものとなった 漠然とした憧れが自分の手に届くところに来る決して軽率ではなかった思い以上の物を感じた 死期を看取るより責任が重い 一歩深く入り込んだ助産師としての責任の大きさを感じた 1年間で責任の重さをひしひしと感じた 責任が重く怖い等気持ちの変化があった |
| | 助産師に対する認識の変化 | 看護師の職務よりさらに一歩深く入り込んだ助産師としての責任は大きい。 助産師の仕事はケアがすごくたくさんあるとイメージがかわった 勉強すれば簡単にできるように考えていた 入学前は出産で入院中に関わる仕事だと思っていた ライフサイクル全般に関わらなければならないと思った 分娩以外に幅広いところで見ていくのはすごい 分娩介助が主というイメージが女性のライフサイクルを全部支えるいい仕事だと思った スタッフとして臨床に出ていた時は看護師なので細かいことまでは全然わからなかった 看護師としての業務がいっぱいで助産師の仕事を目の当たりにしていなかった 第1期の看護というかケアがすごいいっぱいあるんだってのはイメージが変わった 自分の病院ではやってないこととか、色々な指導の仕方とか、全然違う新しい知識をもらった 自分の所属病院以外に実習に行くこと)自分の病院のためにもなるし、自分のためにもなる うちの病院で生かすにはとか、自分の病院でこうやって取り入れられるものはあるかとか、そういうの考えながらしていたら楽しい 実習病院はメリットがあった 対象者に対して裏表がある助産師でイメージが変わった 実習で携わってくれた指導者の助産師さんたちはすごい刺激を受けたというか、すごい尊敬する それぞれにいいところがあるのでいいところどりでいるんなどころが盗めたらってところがすごいあった いっぱいいろんな指導者さんと関わる事ができた いろんな助産師さんが憧れ 自分が出産で入院した時から実習病院に理想の助産師がいた 基本的に実習施設の助産師は皆よい それぞれの助産師に関わる事ができたので、それぞれの優れたところをとりいれたいという憧れ 実習指導者からすごい刺激を受けてすごい尊敬している 実習で一瞬で色んなことを見抜いて実践していける人たちをみた お産や乳房ケアにポリシーがありぶれない感じが好き 寄り添うということがわかるような優しい助産師がいた。 言葉のすごく話術が上手な方がいた 技術がすごい人もいた 診断がすごい助産師がいた 説明が具体的にすぐわかりやすく親しみがある助産師 指導者の色んなところが盗めたらという気持ちがあった 実習指導者が責任感が強い人だったので尊敬できる。 助産師さんによってカラーとか盗みたいになってところがいろいろ個別にあった |
| 良くも悪くもモデルとなった助産師たち | 漠然とした憧れ | 基本的にはいいところがあるのでいいところどりでいるんなどころが盗めたらってところがすごいあった いっぱいいろんな指導者さんと関わる事ができた いろんな助産師さんが憧れ 自分が出産で入院した時から実習病院に理想の助産師がいた 基本的に実習施設の助産師は皆よい それぞれの助産師に関わる事ができたので、それぞれの優れたところをとりいれたいという憧れ 実習指導者からすごい刺激を受けてすごい尊敬している 実習で一瞬で色んなことを見抜いて実践していける人たちをみた |
| | 真似たい技術をもった助産師 | お産や乳房ケアにポリシーがありぶれない感じが好き 寄り添うということがわかるような優しい助産師がいた。 言葉のすごく話術が上手な方がいた 技術がすごい人もいた 診断がすごい助産師がいた 説明が具体的にすぐわかりやすく親しみがある助産師 指導者の色んなところが盗めたらという気持ちがあった 実習指導者が責任感が強い人だったので尊敬できる。 助産師さんによってカラーとか盗みたいになってところがいろいろ個別にあった |
| | 学生にやさしい助産師 | 学生にも産婦にも笑顔で対応している助産師がモデルとなった。 指導者は自分の経験などを語ってくれた。 学生のメンタル面を気にかけてくれた |
| | なりたいた助産師に出会わない | 特定の助産師のモデルになる人はいない。 助産師を見る場面はあったがモデルになる人はいない 悪いモデルがいた |
| 取得した資格を活かす抱負と不安 | 助産業務より優先される就職先の条件 | 子どもが入院して患者さんの気持ちがわかるようになったので努力している 子どものことがあるので就職は産科でなくてもいい 子どもがいるので近い病院に就職する 夜勤の時の子どもの対応が心配 心配はやっぱり家族との調整がうまくいかどうかである お母さんに迷惑をかけちゃうんで、そのへんは心配ってのが 奨学金をもらっている病院は多忙で怖いと聞いており本当だと思った 看護学校の先生が就職するならまずは大きな病院がよいと勧めた 就職は働きやすく、勉強になり、安全な病院を選んだ スタッフがやさしく評判が良いのその病院に就職する 一回は働きたいので看護の実習でお世話になり同期生がいる 附属病院に戻る。 ハイリスクが多い病院に就職するが産婦にはかわりない |
| | 自分の適性を踏まえた将来像 | 自分の出産体験はいい思いをしていないので、長くかわられる助産院などに勤務できたらよい。 将来助産院で働きたいと思っていたのが行けるかどうか 自分の能力を見極めて進路を考えたい 自分で判断しなくてはいけないので自分に向いていないと思った。 女性の方に寄り添えたらいいが、自分の目の前のことやるのが精いっぱい。 看護技術がある分、看護技術に関しては心配はないが助産師になってからの新たな技術とか知識とかをやっぱり勉強していく |
| | 成長したい自分 | 早く一員として役立ちたいという気持ちがある 大きな病院で経験を積んだら産褥入院みたいなケアをした たぶん働いていればもっとこれを知りたい、勉強したいと思うことがあるので、極めて行きたい 講習に行ったりとか、参加して自分をこう高めていきたい 自分の病院ではやってないことを取り入れることは楽しいのではないかと 分娩介助は怖い、時間がたっており早くやってみたくは思う |

就職先は子どもがいることを考慮して、助産師業務の質よりも通勤可能圏内で決めている学生もいた。

やっぱり子供がいるので、あの、(就職は)なるべく融通がきくのがいいかな(中略)給料とかそういう面ではなく。(学生F)

Ⅲ. 考察

1. 職業選択動機から入学まで

今回の対象者は全員出産経験者であり、自分の出産体験等を契機に助産師になろうと考えていた。

しかし最初から進学を希望し、育児が一段落したり、折をみて受験したり、チャンスがあつて受験した者もあり、その時にはすでに育児中であった。子どもの年齢は問わず、就学前、就園前であっても行きたいと思ったときに勢いで受験している者もいた。様々な方法で受験対策をしており、看護学校や職場の人たち、および実父母、義父母等を巻き込んで計画していた。合格してから調整をつける学生もいた。まずは合格することが先決であり、それからサポートシステムを整備したことが窺える。

出産体験は助産師と蜜に関わる場であり、自分の出産体験と照合して助産師像を構築していることが窺える。ある学生は、産科での経験のリベンジをするような気持ちで助産師になろうと決意する。日本では保助看法学校指定規則で1年以上の助産師教育を条件としている。もしICMなどで推奨する18か月以上の助産師教育が前提であれば助産師になることを断念した可能性もある。1年間で助産師免許が取得できることは、今回の背景の学生たちにとっては魅力があるのではないかと推察する。今後も社会情勢などから、一旦は保留であった助産師になりたい気持ちが再燃し、受験する学生は増加していると推察される。またその入学するまで大変さを実感できないこともある。従って入学以前、特に受験するまでに入学予定者を集合させて、4月からの学生生活の実際を伝え、調整するように話す必要がある。この視点でいえばオー

ブンキャンパスは有効であると考える。

今回の対象者たちは入学前ガイダンスを受け、そこで実際的な学生生活を想定し、様々な工夫をしている。また家族や職場の協力を前提として入学していたことから、長期計画があり、子どもの年齢なども考慮し、サポートシステムも調整している。教育側はこのような学生の背景などを考慮しつつも、特別扱いはなく、他の学生との公平性を保ちながら対応する必要がある。

それでも今回の語りにもみられたように、子どもへの影響は侮れないものがある。本人の調整を超えた不測の事態として、多少なりとも子どもへの影響があることを十分に認識し、それでも学生として1年間学業に従事できるかどうか確認したうえでの意思決定が必要だと考える。またオープンキャンパスなどの際に、このことを伝える必要がある。

2. 入学後に直面したことについて

入学すると現実に直面し、学生は自分が想像した以上の大変な生活を体験する。学生生活を続ける中で自分よりも若い学生たちにおいてはパソコンの習熟度が高く、コミュニケーションスキルが異なることを実感する。また家事、育児と学生生活との両立に憔悴し、常に疲労している状況にさらされる。しかし育児中の学生は、入学できたこと、長年あこがれていた助産師になることを描き、学生生活を継続できるのではないかと考える。そして育児、学生生活の両立においては、家族を巻き込み、それが拠り所となって継続できると推察できる。

病院に勤務する助産師が、妊娠・出産・育児をしながら就業を継続していくために重要な要因は、助産師本人の高い仕事意欲と家族の理解・協力を前提に、育児と仕事の両立しやすい職場環境と上司の理解が就業継続を決定付ける上で重要な要因であると報告されている^{7)~16)}。今回の対象者は育児中の学生であるが、いずれは就労継続する助産師として、強い意欲、家族の理解、協力などが不可欠ではないかと考える。助産師学生が育児と両立しながら学生生活を続けることは、ほぼ病院勤務助産師が育児をしながら就業継続している点と共通するところが大きいと考える。

教育側ではこれらの学生の意欲を確認し、卒業後も助産師として就業継続し、経験を積むことの大切さを伝えていく必要がある。せっかく取得した資格が活かされなければ、これまで協力してもらった家族の努力などが反映されない結果となると推測する。

3. 子どもへの想いについて

子どもの年齢が就学前の学生もおり、継続事例への対応など、夜間帯のサポートシステムはとれている。しかし実際に子どもに泣かれる、変化が表れたときに葛藤する場面の語りがみられた。今回の対象者の多くに幼稚園児がおり、母親と接触する時間が必要にもかかわらず、課題や実習などで自宅にいても母親が子どもと接触する時間が少ない状況が考えられる。

青島¹⁷⁾は『『子供の手が離れたら』という常套句は自分の人生を生きていないという後ろめたさや、自分の人間的な成長がストップしている現実をしばし忘れさせてくれる。だがいざ“その時”になると自分のための新たな一步を踏み出すことは容易ではない』と述べている。対象者たちは子供の手が離れる時期を待たずに、自分が思い立った時に助産師学校への入学を考えている背景に経済的な問題もあるのではないかと推察する。日本では育児において経済的負担は大きく、ことさら高等教育になるに従い、負担が重くなる。このため、子どもが義務教育で特に小学校の低学年あるいは就学前に受験を考え、先の事を深く考えずに決意し、自分の行動を合わせる結果となったと推測する。

4. 卒業時の意識の変化

山内¹⁸⁾は実習終了後の学生の助産師観において、実習終了後は、分娩介助を体験しての学び、助産師に求められる能力についての実感、自己の成長への自信、社会貢献への意向などが抽出され、実習終了後、学生の助産師感が現実的になったと述べている。

手がかかる年齢の子どもがいながらも、機会があつて受験し、自分の生活を育児と学生生活との両立に向けて調整し、負担を覚悟の上で1年間が経過する。学生はようやく卒業が目前になると、就職に向けて気持ちを集中させる。新人助産師として最初の就職先の意義は大きいと考える。篠原¹⁹⁾は助産師のあり方は、アイデンティティ形成にかかわっていること、また、助産師としての専門性の確立は、助産師に対する不満、助産師としての責任に対する重圧の解決策にもなりえる可能性があることを指摘している。このことから対象者たちが助産師の責任の重さを実感するなかで、アイデンティティ形成に影響し、専門職としての使命感だと実感できると、大変な助産師業務も職務満足につながる可能性も大きいと考える。

猿田²⁰⁾は助産師のキャリア開発には、アイデンティティ、仕事に誇りをもち将来像を描く個人の意識が必要で、経験年数により違いがあり、先輩の存在、職場環境が影響を与えており、個別に長期のサポート

が必要であると述べている。1年間の教育を経て新人助産師になるにあたり、職場の環境は大切であるが、対象者たちは育児中であることから、勤務可能な施設に限界がある。

教育側ではこの学生たちにとって通勤可能で、助産師としてのアイデンティティ形成に有用な条件の施設を共に考えることも任務であると考え。奨学金などを受けている場合なども、その施設が助産師としてのアイデンティティ形成に有効かどうかを見極め、学生にとって本当に助産師として成長できるかどうか、共に考える姿勢が必要であると考え。

IV. 結論

育児中の助産師学生に関する特性及び対応について、結論は次の通りであった。

1. 入学動機は自分の出産体験などが主ではあるが、妊産婦としてみた助産師もモデルとしての意義は大きい。
2. 助産師教育機関への入学に際して、子どもの年齢を踏まえて受験決意をすることが望ましい。子どもの発達過程などへの影響と助産師学校の現状を見据えて計画することが期待される。
3. 学生生活は厳しいものと想定し、それに際してサポートシステムを充実させ、どのようなケースにおいても調整に融通性があり、妊産婦へのケアに影響しないような対応がとれることが不可欠である。
4. 教育側は学生を特別扱いはしなくても、背景を考慮し、卒業時は就業先を決定するにあたり、限られた条件のなかから、可能な限り助産師としてのアイデンティティ形成ができる職場を共に考えることが望まれる。
5. 妊産婦としてみた助産師と、学生として助産師を見るのでは視点が異なり、厳しい現実を見るなかで実習などを通して理想的な助産師モデルを見出すことは重要で、そのための環境調整が教育側に求められる。

V. おわりに

今回の対象者は助産師学生という共通する背景をもつと考え、均質ととらえて8例程度を対象とした。Kuzel²¹⁾ が等質な研究対象者の場合のデータは6~8人分は必要であるという理由による。

しかし、子どもの年齢、対象者の経済的な背景、家族背景などを考慮し、インタビューの方法を変えるなど検討する必要がある。この視点から、本研究の場合

はインタビュー技術の未熟性なども限界となったと考える。今後は現役の学生などと比較検討することで学生の異なる傾向を知ることができると考える。本研究は第56回日本母性衛生学会ポスターセッションにて発表したものを手直し、論文にまとめたものである。本研究において半構成的面接にご協力くださりましてX大学の8名の卒業生に感謝いたします。

引用文献

- 1) 日本看護協会ホームページ、国際助産師連盟 www.nurse.or.jp/nursing/international/icm/
- 2) 田中時穂、助産師学生が認識する母性看護学実習と助産学実習の違い、日本看護学会論文集：看護教育 45, 134-137, 2015.
- 3) 高野真由美、社会人経験のある新人看護師の困惑感と取り組み状況への理解と支援、社会人経験を持つ新卒看護師の職場適応を促す関わり、看護実践の科学、vol.37, No.5, 40-45, 2012.
- 4) 高橋 隆子、社会人経験をもつ看護学生の体験に関する実態調査、神奈川県総合リハビリテーション事業団厚木看護専門学校紀要、3, 25-29, 2013.
- 5) 渡邊 恵、鈴木玲子ら、看護教員が認識する社会人経験のある学生と学習者としての特徴と教育の困難感、日本看護学会論文集、看護教育43, 106-109, 2013.
- 6) 中島由紀子、山内 葉月、助産学教育に関する研究 助産学生の職業的アイデンティティの実態と関連要因、保健科学研究誌11, 39-48, 2014.
- 7) 中川 光子、須栗 裕子ら、子育て中の看護師の職業継続に関する要因調査（原著論文）日本看護学会論文集：看護管理、42, 212-215, 2012.
- 8) 北川 良子、助産師の出産・育児と就業継続の関連要因 就業継続状況に焦点をあてて、日本助産学会誌24-2, 345-357, 2010.
- 9) 北川 良子、出産・育児期にある助産師の仕事意欲に影響を及ぼす要因、母性衛生51-4, 684-693, 2011.
- 10) 北川 良子、出産・育児期にある助産師の就業継続に関する実態調査、母性衛生51-2, 416-424, 2010.
- 11) 西野有理、磯山あけみ 乳幼児を育てる中堅助産師の育児と就業の両立に関する研究、茨城県母性衛生学会誌32, 14-20, 2014.
- 12) 橘田 春菜、平田 良江、名取 初美、仕事と育児を両立する助産師の原動力、山梨県母性衛生学会誌

- 12-1, 1-7, 2013.
- 13) 伊藤のぞみ、岩崎和代、助産師の職業キャリアと出産・結婚観の意識に関する研究、日本助産学会誌、22-3, 482, 2009.
 - 14) 岡津愛子、松村恵子、助産師の出産体験による働く事への意識変化、香川母性衛生学会誌12-1, 47-51, 2012.
 - 15) 篠原 良子、日本の助産師自身が感じる助産師業務をめぐる状況 自由記述内容の分析から、三育学院大学紀要、6-1, 37-47, 2014.
 - 16) 西山 木梢、畑山 億子ら、助産師学生が分娩介助した産婦が助産師学生に抱いた認識、中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌(1880-6619) 9巻、01-204 (2014.01) Page59-67 (2012.03)
 - 17) 青島祐子、女性のキャリアデザイン、学文社、21, 2009.
 - 18) 山内 まゆみ、専修学校に在学する助産師学生の成人学習能力に関する一考察、医学と生物学(0019-1604) 157巻6-1 Page892-898 (2013.06)
 - 19) 篠原 ひとみ、吉田 倫子、本学の助産所実習における実習記録からみた助産師学生の学び、成田好美、兒玉 英也、秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要(1884-0167) 20巻1号
 - 20) 猿田了子、渡邊 香ら、助産師のキャリア開発意識に関する研究、日本母子看護学会誌 8-2, 9-20, 2015.
 - 21) Kuzel.A.J, Sampling in qualitative inquiry. In Doing Qualitative Research (eds. B.F.Crabtree & W. L. Miller), 2nd edn.33-5/Thousand Oaks, Sage, 1999.

A Study of Midwifery Student-Mothers —Negotiating Study and Child-Rearing—

Yumi Suzuki, Koga Yuko, Youko Shimada*

* Ashikaga Institute of Technology

Abstract

In order to contribute to midwifery education, semi-structured interviews for eight midwifery students who were also raising children were conducted, regarding the motivation for enrolling on the course, their challenges after enrolling, impact on their child/children, and relationship with other younger students. The results were analyzed inductively and qualitatively. As for the motivation and preparation for the enrollment, two categories: 'long-held aspiration', 'midwives seen in many situations', and 'desperate to pass the exam' were identified. As for the challenges faced after enrollment, three categories: 'hardship of studying that exceeded the expectation', 'thoughts about the child that are always in mind', and 'life as a student which cannot stand without support of others' were identified. As for the feelings towards their child/children, three categories: 'life changing that involves others', 'situations where, like it or not, study has to come first, not the child', and 'a parent who tries to convince herself that the child is understanding and appreciative' were identified. In addition, as for the future image of themselves at the time of graduating, three categories: 're-acknowledgment of the work of a midwife', 'midwives who had become the occupational model either positively or negatively', and 'hopes and worries about using the obtained qualification' were identified.

All the interviewees had childbearing experience, and their motivation of choosing the vocation came from their own childbirth experience, whether it was a positive one or a negative one. After enrolling on the course, they were worn out trying to balance the household and childcare chores and the study, involving their family members, trying to convince themselves that the child was understanding and appreciative, and trying their best to balance the child-rearing and studying while feeling guilty.

Their priority in finding work is that it should be somewhere easily commutable, putting childcare arrangements first in their consideration. It is expected that they will re-acknowledge the serious responsibility and the breadth of the work through on-site practice and other experiences, find various midwifery role models that they had not known at the time of the enrollment, and form an occupational identity after graduation.

Keywords: motivation for vocational choice, student mothers, midwifery education, balancing studying and child-caring, midwife role model